資料７

学校の規模と安全な通学環境

地域性にかかわらず共通する課題

地域によって，小規模校となった経緯や通学環境には**違いがある**。

しかし

人数が少なく多様な意見が出にくいため，学習内容の深まりや広がりが難しい，また，体育では実施できない球技があるなど，児童生徒数が少ないままでは解決できない教育課題が，**地域の特性によって異なるわけではない**。

そこで

学校が教育活動を行うために必要な学校規模には，**全市的な基準が必要**。

その上で

通学環境等の地域の特性は，**適正規模とは別に考慮**する必要がある。

学　校　の　規　模　を　考　え　る

☆ 教育課題を解決するために必要な学校規模は・・・・・

児童生徒の人間性・社会性の育成の観点から，卒業まで同じ学級で過ごすことで，交友関係や価値観が固定化することを防ぐ必要があるため，小中学校とも**全ての学年でクラス替えが行える学級規模**が必要である。	小学校：**12学級** （各学年2学級） 中学校：**6学級** （各学年2学級）
中学校の各教科の指導時数を考慮すると，少なくとも**5教科**(国語・数学・理科・社会・英語)**では**，教科ごとに情報交換や教材研究ができるよう**複数の教員が配置される**とともに，**実技系教科**(音楽・美術・保体・技術・家庭)**にも，正規の教員が配置される**ことが望ましい。 この場合に，各学年2学級の6学級規模では，制度上配置される教員では対応が難しいため，最低でも各学年3学級の9学級規模が必要となる。	中学校：**9学級** （各学年3学級）
小学校のクラブ活動や中学校の部活動の実施状況から，球技などの主要な種目が実施でき，**児童生徒に十分な選択肢を用意できる規模**が望ましい。	小学校：**12学級** （各学年2学級） 中学校：**9学級** （各学年3学級）

⇒ 小学校で，**各学年２学級の12学級**

中学校で，**各学年３学級の９学級**　が必要である。

安全な通学環境を考える

	通学環境の特徴	「安全な通学環境」を考える際に大きな問題となるもの
都心部エリア	校区面積が狭く，通学距離は比較的短いが，交通量の多い道路を横断する必要がある。	交通量や歩道の整備状況などを考慮した，安全な通学路を，どのように設定するか。
周辺部エリア	校区面積が広く，通学距離も長いため，バスなどの利用が必要な校区が多い。	長時間の通学が児童生徒に与える負担も考慮し，使用する交通機関など，通学手段をどのように確保するか。